

特254

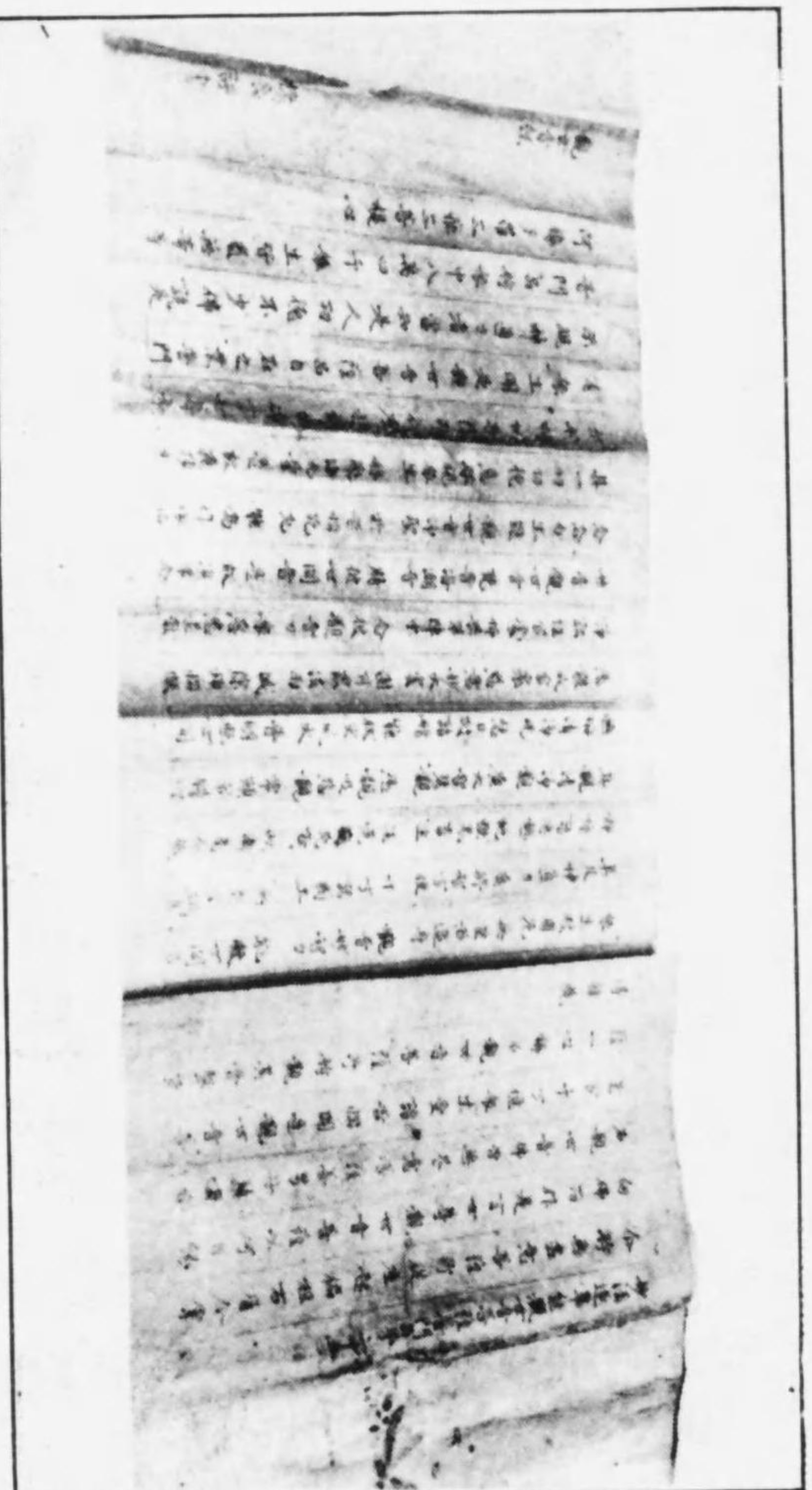
131

筑後に
於ける
兩征西大將軍宮

始



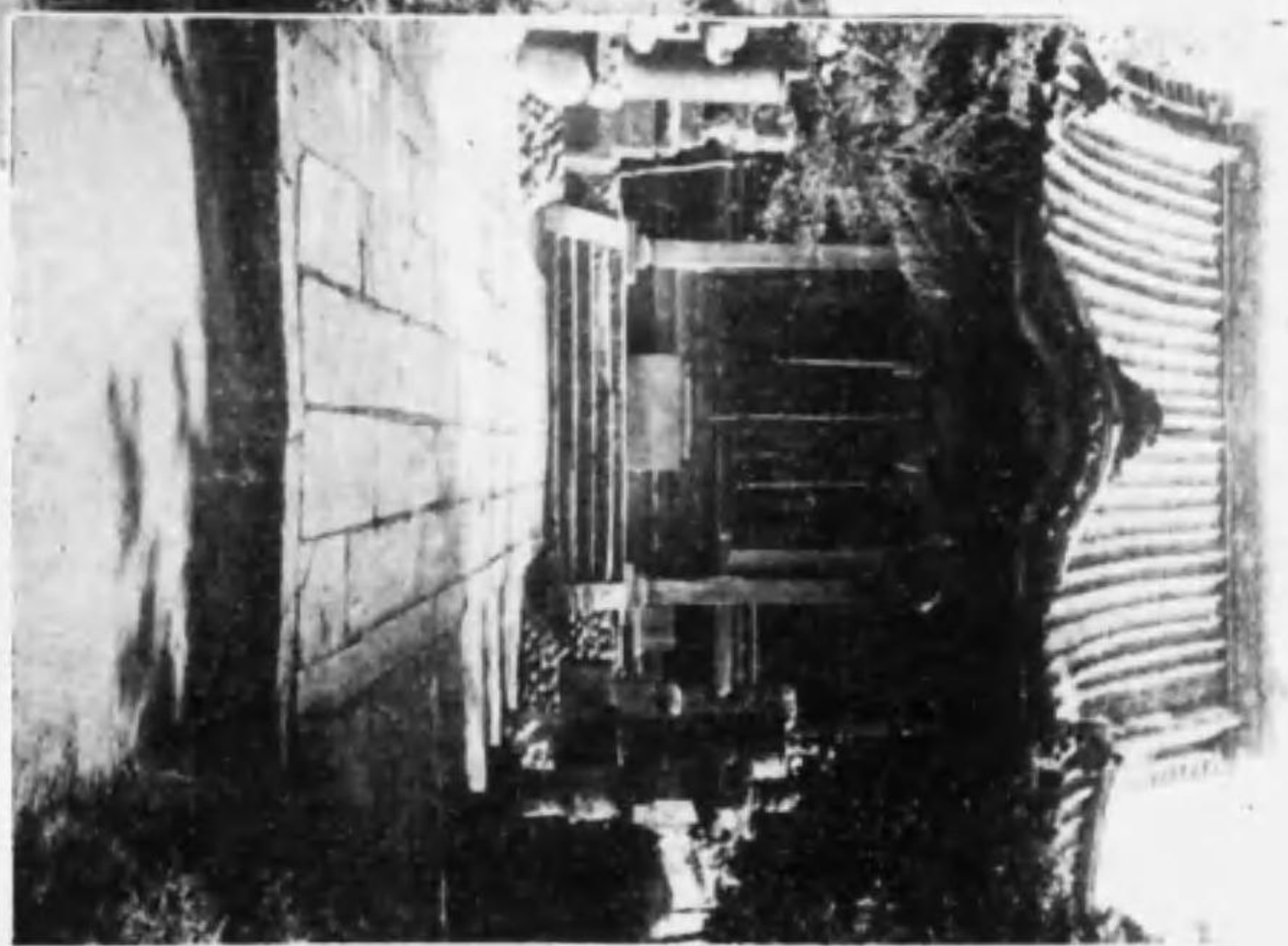
品門普經華法



(藏經寺光千) 筆御王親良懷
(字鑑士博助之善註)

特

(左)梅軍將 (右)社神陣宮



緒言

近時我が國が内治外交共に寒心すべき非常時に直面してゐるので、今回本社
 御祭神にまします懐良・良成兩大將軍宮の御偉績を顯彰し奉りて盡忠報國の志
 氣を鼓舞したい考で、一昨年三月本縣社會教育課より成人教育資料として編纂
 配布せられた「筑後に於ける兩征西大將軍宮」の附録年表に若干の増補を爲し
 又挿畫を一二變更し縣當局の認許を得て、
 皇太子殿下——後の大正天皇——當社御參拜三十三年の記念日に、本書を出版
 して汎く之を世に頒つことに爲たのである。

昭和八年十月廿四日



宮陣神社社務所

筑後に於ける兩征西大將軍宮

小引

我等は鎮西に於ける兩征西大將軍宮の御在所であり御奮闘の地であつた筑後に居住し、千古渝らざる大袖の風物に接し、筑水の大觀を恣にし、菊池・五條其他勤王の諸將が王事に活躍した跡を思うて、感慨轉た切なるを覺ゆる。

客年八月、秩父宮殿下には、畏くも太刀洗飛行隊に御入隊遊ばされ、親しく菊池武光奮闘の地である大保原の戦蹟をみせたまは覽せられ、また征西大將軍懷良親王の御在所であつた八女郡矢部に御成あらせられ日向神の奇勝を探らせられた。

殊に明年三月は、恰も懷良親王の御薨去五百五十周年の御遠忌に當らせられる。されば今日宮の御遺徳を偲びまつりて其御忌辰を迎へ奉ることは洵に感慨無量と言はねばならぬ。

茲に吾等はおほけなくも、筑後に於ける前後兩大將軍宮の御偉業を中心に、主として五條・菊池氏の精忠を叙し、郷土に於ける其勤王遺跡を訪ねて、國民精神涵養の資に供したいと思ふ。

五條氏の功績に就いては、其活動が主として政治上にあつた爲に菊池氏等の武動に比して遜色を見るの感あるは、實に遺憾である。然も兩大將軍宮の御終焉地が我が筑後矢部である以上。五條氏に就いては、いくらか精叙の要があらう。

されど此小冊子は、史實の檢覈考證を主とする専門家の閱覽に供する物でなく、通俗平易を旨とするので、事實は太平記、北肥戦誌、鎮西要略等の文に據りたるも多く引用の古文書など總て書き下しに譯したのである。

元來本篇は、叙述の範圍を南筑地方に限定して起稿すべく囑命せられたのであるが、事件の關係上二三他地方の事にも言及した。然し何れも記述が簡に過ぎて要領を得ぬ點も多からうと信ずる。筆者素より操觚を業とする者でないから、行文謫劣意を盡さざる所多く、竊に忸怩の念に堪へない次第である。

昭和六年紀元節の佳辰

編者識

下筑後河過菊池正觀公戰處感而有作

賴山陽

文政之元十一月	吾下筑水賦舟筏	水流如箭萬雷吼	過之使人豎毛髮
居民何記正平際	行客長思己亥歲	當時國賊擅鳴張	七道望風助豺狼
勤王諸將前後歿	西陲僅存臣武光	遺詔哀痛猶在耳	擁護龍種同生死
大舉來犯彼何人	誓剪滅之報天子	河亂軍聲代銜枚	刀戟相摩八千師
馬傷胄破氣益奮	斬敵取胄奪馬騎	被箭如蝟目皆裂	六萬賊軍終挫折
歸來河水笑洗刀	血迸奔湍噴紅雪	四世全節誰儔侶	九國遠巡征西府
棟蓼未肯向北風	殉國劍傳自乃父	嘗卻明使壯本朝	豈與恭獻同日語
丈夫要貴知順逆	少貳大友何狗鼠	河流滔滔去不還	遙望肥嶺嚮南雲
千歲姦黨骨亦朽	獨有苦節傳芳芬	聊弔鬼雄歌長句	猶覺河聲激餘怒

筑後に於ける兩征西大將軍宮

目次

一、はしがき……………一

二、征西大將軍宮の御下向……………四

三、九州の平定……………一三

四、大保原の戦……………一八

五、征西府の極盛……………三五

六、高良山御陣……………三三

七、矢部の御幽栖……………三五

八、大楠の御所……………四一

九、むすび……………四八

一〇、附録 年表……………五一

筑後に於ける兩征西大將軍宮

(後醍醐天皇御製)

待ちなれし跡はよそなる

山の奥に身も埋るゝ

庭の白雪

一、はしがき

吾國の歴史で吉野朝五十七年の歴史程悲惨な血と涙とを以て彩られた頁はあるまい。

竹の園生の尊き御身であらせられながら、諸國勤王の士を鼓舞せられんが爲め、天さかる邊陲の孤城に戈を枕として御夢も圓かならず、悲風慘雨の境涯に一生を終らせ給へる諸皇子の御行動は、申すも畏き程痛はしき極である。

宮方の諸將が、身を捨て家を忘れ一族を擧げて君國に殉じた精忠は、あはれにもまた痛ましきものであつた。殊に後醍醐天皇御登遐後は南風愈競はず、大局既に極まつて孤城落日の觀あるに

拘らず、勤王の諸將が從容として節に死するを樂んだ悲壯な史實は、全く我國民性の精華である。

中にも征西大將軍懷良親王が、襁褓の中より皇運恢復のため父の帝の御側を離れさせられ、五條頼元、中院義定等に冊かれ給ひて、雲山萬里遠く西陲に御旗を進めさせられた颯爽たる御雄姿を想察し奉るもの、誰か感激の涙に咽ばないものがあらう。

宮の御西下により、菊池、阿蘇等勤王の諸將が勇躍蹶起したことは言ふまでもなく、名和、新田の諸族も遙に京畿を去つて馳せ參するものも尠からず、我筑後にても草野、木屋、黒木、星野等の一族が終始其節を一にし、勤王の大義に殉じたことは、宮の御盛徳によること勿論である。

將軍の宮が、父の帝の御忌辰には、法華經を書寫して阿蘇石清水の諸社に納め追孝の誠を申べさせられ、又御母、靈照院禪尼のために、梵網經戒品を書寫して其冥福を祈り給へる御孝心や、遙に征東將軍宗良親王に友愛の情を寄せて、國歩の艱難を慨き給ひしありのすさびの御水滸の跡など拜しては、人倫の大道を亂世の間に維ぎ留め給ひし暗夜の一燈として仰ぎ奉らねばならぬ。

宮が天下靜謐の爲に九州の各社に祈願を籠めさせられ、殊に高良下宮社の御願文に萬民の艱苦を思しめされ、御身を責めて神明の加護を仰ぎ祈り給ひし御心事に御仁慈の程も窺はれて忝さに

涙滯るゝのである。

況んや、金枝玉葉の御身を以て堅を被り鋭を執り、躬ら矢石を冒して戦線に立ち重創を受けて奮闘し給ひし御勇武は一世の範となすべく、明使を却けて國威を壯んにし給ひし御英斷は日東帝國の矜とも云ふべきであらう。

かくて親王の御武威は、九州を風靡して四國中國に及び、將に御東上遊ばされ、大勢を挽回して先帝御寄託の重任を果し給はんとせられたが、不幸にも五條頼元父子、菊池武光其子武政等の輔佐の將相次いで卒したので、其後西下した今川了俊の策に乗せられ、宮方の武運も次第に頹勢に傾いたことは是非もない運命とは言ひながら實に遺憾の至りである。

懷良親王の後を承けて御下向遊ばされた後の大將軍宮良成親王は、まだ御若年の御齡であらせられながら、皇運陵夷南黨の勢力不振の時に、佐賀平野なる千布、蟻打、或は肥後の託摩原に自ら陣頭に馬を進めて奮戦し、敵膽を寒からしめられた其御勇武は、鎮西勤王史を飾る棹尾の御壯舉で、其較著なる御功績は炳として日星の如く明かなるものである。

此兩將軍の宮の下に、文臣として五條頼元が輔弼の任に當つて、君徳の培養に寢食を忘れ、或

は帷幄に參して制令を宣布し九州統一の策を講じたる如き、菊池武光父子が惡戰苦闘を續けて終始一貫王事に盡せし壯烈なる忠節の如きは、千載の下懦夫をたゞしむる立派な史實である。

二、征西大將軍宮の御下向

延元元年五月、楠木正成兄弟は湊川に戰死し、新田義貞また敗れて丹波路を経て京師に逃げ歸り後醍醐天皇は神器を擁して叡山行幸となつた。間もなく山門の戰に、千種忠顯を始め名和長年等戰歿し、皇運日に非にして中興の業も頼み少げに見えた。

かくて叡山の夏もいつしか暮れて、萩の葉渡る風の響にも秋の哀れさ身に沁む頃となつた。帝は行末の事ども思し出でられて、義良親王を東國に宗良親王を伊勢に恒良、尊良の兩親王を北國に差遣せられ、各地方に宮方の勢力を扶植し、やがて東西呼應して京師を恢復し給はんと叡慮を廻らされたのである。

殊に九州は軍略上最も樞要の地であるから特に重きを置かれ、懷良親王を召されて鎮西統一の大任を下し給はつた。かくて延元元年九月十八日に綸旨は九州の官軍に下つて、親王は征西大將軍宮として御西下の旨傳へられた。

親王の叡山を發して鎮西御下向の途に就かせられたのは、御年纔に十歳前後であらせられた。

……(4)……

國歩艱難の時、遙に萬里の波濤を凌いで鎮西の野に皇威振暢の第一歩を印せられるには、必ずや其背後に輔翼の臣として有爲の人物がなくてはならぬ。

果然御幼冲の宮の御教育其他重要な任務を背負つて、扈從筆頭として隨行せる人に、五條頼元があつた。

彼は表面の官職こそ勘解由次官であつたけれど、其實征西副將軍であつた。彼はかゝる大任を帯びて宮に供奉し、中院義定等所謂御手人十二人と紀州湯淺の港から一路九州をさして西下したのである。

◇

◇

延元四年八月、寂寞たる空山の裏鳥啼き日暮れて、物の哀れもいや増さる頃、後醍醐天皇は吉野の行宮にて御風に冒され給ひ御心地例ならねば

露の身を草の枕におきながら

風にはよもと頼むはかなさ

の御製さへ物し給うたが、嗟天無情、御惱は日毎に重らせ給ふのみであつた。されば後の事どもつばらに綸言を遣させ給ひ、御劍と法華經とを左右の御手に持たせられて、十六夜の月と共に遂

……(5)……

に雲隠れ給うた。

時に寶算五十二、天下を知しめすこと二十一年であつた。
かゝる時にも九州のことを深く思し出でられて、崩御の前日五條頼元に綸旨を下され、後事を託し給うたのである。頼山陽の吟じた筑後河を下るの詩に「遺詔哀痛猶在耳」の一句は武光のことでなくて寧ろ頼元の心情でなくてはならぬ。

此遺詔を拜讀すると、延元の帝が如何に頼元に信賴し給ひしか、其叡慮の程が窺はれると共に、鎮西經略の大事が一に頼元の手腕に委せられたことは明である。

去る頃より御惱のことあるによりて陸奥親王に御讓國し了んぬ。日來の軍忠を違へず叡旨を達すべし。縦ひ不慮の御事ありと雖も深く憑み思食され候上は官軍等を勇ましめ殊に朝敵追罰の壽策を廻らすべし。當山に於ては要害といひ、祇候の輩と云ひ、更に子細あるべからず。其旨を存じて軍勢等を下知せしめ給ふべき者、
天氣此の如し。仍て執達如件

八月十五日

右中將 實躬

謹上 勘解由次官殿

陸奥親王は後村上天皇におはしまし、實躬は中將で藏人頭を兼ねた人で、此綸旨を承つた人で

ある。勘解由次官が五條頼元たるは言ふ迄もない。

此時の御遺詔は他にも下されたのであらうが、今では此一通が五條家に保存されてゐるのみである。これは薄葉の小さな紙に書かれたもので、此文を拜誦するもの誰か哀痛の感にうたれないものがあらう。



當時中央と地方との交通不便にして、通信亦困難なるは想像に餘るものがあつたので、密書ヒツシの材料は灰液打紙ハイエツチで薄い小さきものや、絹又は布帛で、多くは僧侶修驗者の類によつて齎され、頭髪の中に籠め、或は衣帯の中に縫込み敵中を潜行するのであつた、世にいふ髻の綸旨といふのは此種の文書をいふのである。

此頃は敬神崇佛の風が盛であつた爲、僧侶に對しては多くは無禮を加へなかつたが、夫でも或は捕へられ、或は奪はれ、到着しないことも少くなかつた。

一例を擧ぐると延元四年頃と思はるゝ五條文書に、四條隆資が吉野行宮より五條頼元に送つた四月二十八日付の消息に、

無爲御下着返すく目出候。此御使注進を所持せざるの間、正體なく候。其堺のこと重ねて注

進せしめ給ふべく候諸方利を得るの由、其聞え候。其堺の事相構へて急速一途に沙汰致さしめ給ふべく候謹言。

とあるが、之は伊豫の征西大將軍宮から立てられた使者が、途中注進狀を奪はれ身を以て免れ行在所に達したので、其使に答書を持たせて歸されたもので、正體なくとあるは散々の次第といふ意味である。

此遺詔が頼元の許に達した時は、宮の御一行が心は鎮西に馳せながら機未だ熟せず、煙波渺茫たる伊豫忽那の孤島に佇しき月日を送らせ給ひし時とて、哀悼の御ありさま思ひやり奉るだに、御痛ましき限りである。

さらでだに、秋いよ／＼開けて孤島の紅葉は赤き血潮と見るまでに一面霜に染み、山々の姿も漸く瘦せて、日さへ月さへ時雨に曇れば、晴れやらぬ御胸の惱み、更に深刻におはしましたであらう。殊に天皇より比類なき御信頼を受け、一日も早く鎮西を平定して闕下に伏奏せんと、只そののみを頼みとせし頼元の遺憾は、いかに痛切であつたであらう。

とは言へ、頼元は八月十五日の哀痛の遺勅を拜しては、更に生命を捧げて幼主を輔佐し聖明の値

遇に答へ奉らんとする感激の程が察せらるゝ。古人の所謂「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に臨んで奪ふべからざる」君子人の態度が想望せられて、眞にゆかしさの極である。

頼元は年齢後醍醐天皇より一歳下で、父良枝の後を承け侍讀として昇殿を許されたとあるから、天皇には咫尺の間に伺候して經國の道を講し、御信頼も特に深かつたであらう。

かゝる御信任と重望を以て九州に下向した五條頼元はそも如何なる素性の人であつたか。

元來朝廷には昔から政務の草案を立つる職務があつた。これが後世外記の局といひ詔勅又は奏文の勘造、公事、除目、叙位を奉行した、今日の語でいへば内閣秘書官ともいふべきもので、後世清原、中原の二家の世職となつた。五條頼元は此清原家の出である。

清原家は舍人親王の裔として眞人姓を稱してゐる。家世々明經家として文章の人多く、清少納言の如きも其一人で頼元もまた生れながらにして學者の血を承けてゐる。

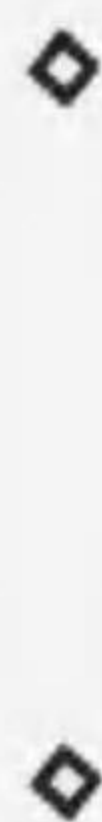
頼元は良枝の長子宗尙の弟である。後二條天皇の徳治元年三月十七八歳の時權少外記となり、圖書頭音博士を経て、後醍醐天皇の正中二年には日野俊基に代つて大外記に進んで居る。宗尙は

大内記となり、父に先つて卒し、其子は幼少のため天皇南狩の時には、京都に残つた。今の船橋子爵家は其後裔である。北畠親房の撰べる職原抄に、

凡て四道の儒者は第一等秀才、第二等明經、第三等明法、第四等算道是なり。明經は……清中兩流其家を立て、以來外史の局務を以て先途となす。……近く先朝に至り清原良枝真人二代（實は七代の誤なり）の侍讀となり七旬の耆老として口づから六經の説を授け奉り……仍て勅問あつて昇殿を聽さる。其子頼元又父の跡を追うて昇殿了んぬ。

とある。頼元の父の良枝は龜山天皇以來後醍醐天皇迄七代の侍讀で、明經家には珍しい學者で頼元も其衣鉢を襲いで文筆に勝れてゐた。

頼元は建武二年鑄錢司を置かれると其次官となり、同時に記録所の寄人となつた。翌年少納言より勘解由次官に轉した。其他の兼職は左近將監、圖書頭、周防介、直講、穀倉院別當、助教得業生造酒正、加賀守等で桶木正成、名和長年等と共に評定越訴對決等のことに預つた。



征西府が吉野朝から如何なる権限を委任せられたかは、征西大將軍宮が伊豫から九州へ御下向の際四條隆資より頼元に送れる手書によつて明かである。これによれば當時の征西府は少くとも

上國の掣肘を受けることなく、自由の見地に於て制令を出してよいと言つてゐる。然も征西府の令旨は殆ど勘解由次官の名で發表された。

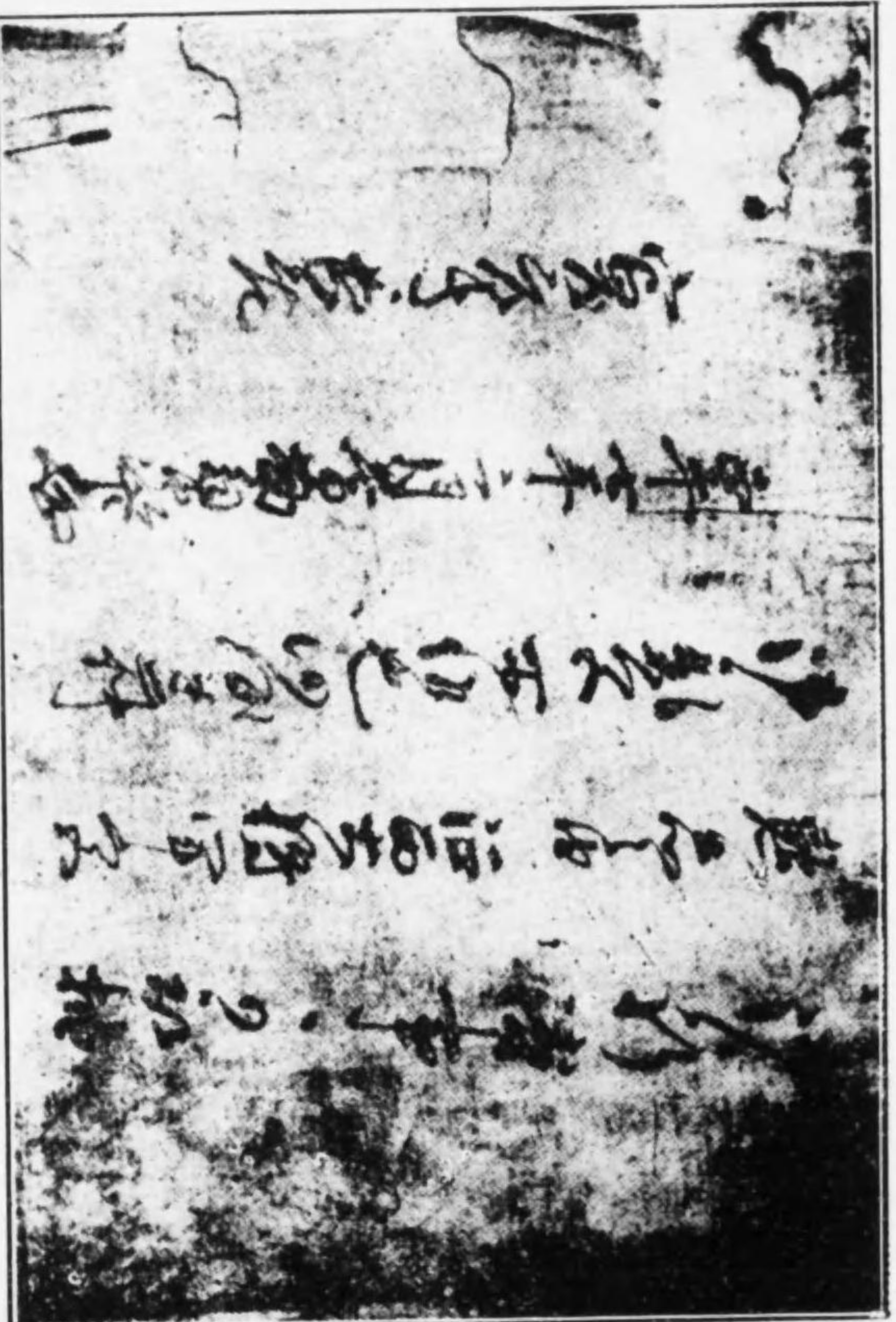
長廣を以て申さるゝの趣委細披露候ひ了ぬ。九州の事は征西將軍に委任申さるゝの上は、每事只令旨を以て計らひ御下知あるの條子細あるべからず候敷。且つ直奏の事は沙汰に及ぶべからざるの由論旨を下され候。遼遠の堺兩方に於て御沙汰に及ばず、每事違亂の基たるべく候。聊相勞る事候之間、委細に及ばず、併せて長廣に仰せ含め候謹言。

六月廿九日

隆 資(花押)

勘解由次官殿

これは天皇は九州の事は全然宮に御委任あらせられ、賞罰の事は直奏を停め少も干渉し給はぬ事を明示されたものである。されば朝廷は征西府に對して軍機を掣肘するは不當であるとの御見解であつて、洵に一大英斷と言はねばならぬ。故に全權を委任さるゝ者の責任は又甚大である。畢竟宮の御威徳に御信頼あつての事であらうが、又其の輔翼の重臣たる頼元の御信任が如何に大なりしかが分る。頼元が後醍醐天皇より生絹で製した金鳥の御旗を賜つた事も、實にもと思はるゝ。宮は忽那島に在しますこと三年。興國三年五月に海路より薩摩に着御あつて、谷山城に入らせられ、正平三年正月には薩摩を去つて海路宇土に御上陸、更に肥後御船を経て菊池に入らせられた。



(祈禱の令旨)

五條頼元筆

寛元寺 佐藤 寛元

太刀洗川



(後村上天皇御製)

年をふる鄙のすまひの秋はあれど

月

は都とおもひやらなむ

三、九州の平定

その頃九州の武家方は少貳頼尙、足利直冬を奉じて探題一色範氏と争ひ、宮方の軍と鼎立するやうになつたので、頼元は宮を奉じて菊池に征西府を立てたのである。

正平三年頼元が阿蘇家に贈つた書状に

御成人の御事にて候間、参り伺ひ申入候。

とあるが、此時將軍宮は既に二十歳前後にならせられたので、頼元は軍事上のことなど宮に啓聞して御裁決を仰ぐやうになつてゐたことが分る。

其間御幼少の宮の御養育に就ては、吉野朝にても一方ならぬ御寂慮を惱まされたことであらう。

延元四年六月廿六日の後村上天皇がまだ皇太子であらせられた時の女房奉書(御内勅)に、御所さま御學問なども心うつくしうおはしまし候はず。誰かぞ取り持ち候ひし人も候はねば、

もんどべのかうの殿の御事のみ、御所さまにもふかくおほしめしいれ候て、おほせ事候。私様にも、にがしまいらせて候事あまりに／＼うたてくおほえて候。御がくもんもけふあす過ぎ候ては正たいなきことにて候はんする御事のみ、うたてくおほさせおはしましてこそ候へ。

とあるが、これで頼元父子に親王を御委託遊された思召が分る。文中もんどべのかうの殿とあるは主水正良氏のこと、頼元の長子である。後村上天皇がまだ皇子であらせられた時には、親しく御教授申上げ懐良親王御西下の折には父頼元と共に宮の御教育の任に當つた人で、在京中には宮中にて直講の任を勤めた。學才高い典麗な精神であつたと思はれる。其後の御内勅にも頼元良氏等忠貞之至り感じ思ひ給ひ候。連々召し仰せらるべく候哉。籌策定めて等閑あるべからず候哉。御稽古の事良氏定めて申し沙汰候敷。紳世安民之謀只此の一事に候乎。

とある。御弟君たる宮の御教育のことに就いて、いかに良氏を御信頼あらせられたかはこれで明である。頼元は軍事上其他の征西府經營に忙はしい爲め近侍及教導の任は却つて良氏の勞多かつたことと思ふ。

宮が菊池に移らせられてより征西府の勢力は次第に強くなつて、正平六年十月親王は自ら五條

頼元、菊池武光、惠良惟澄の兵を率ゐて菊池を發し筑後に向はせられた。

斯くて肥後玉名郡肥猪原に來會した三池頼親の兵を合せ、肥筑の境なる大津山關城の敵軍を攻撃し、進んで筑後に入り溝口城を陥れ、瀬高附近に陣を進め、十月の末には筑後の國府に御陣を立てられ直冬追討の擧に出でられたのである。

宮の筑後御進出については、正平三年四月には親王自ら普門品ふもんひんを書寫して筑後玉垂宮に納めて戦捷を祈らせられ、六月十二日には山鹿郡なる吾平山なごら醫王院に一七日參籠あらせられ、正平六年十月廿七日には三瀦郡酒見村よかけ淨土寺に軍勢の亂入狼籍を禁じ、七年二月廿七日には同郡西牟田村寛元寺に同廿八日には淨土寺に祈禱の令旨を發せられてゐる。

正平十年八月宮は頼元及び菊池武光、武澄を率ゐて北征の途に上り給ひ、八代より肥前に渡り千葉胤定を降し、佐嘉の高木氏を服して神埼に陣し肥前を統一し給ひ、更に豊後の日田より玖珠の險を越えて國府に入り大友氏泰を討ち従へ、豊前の宇佐から筑前の博多を征服し給うたので、薩、日、隅三州の外九州悉く其麾下に屬した。

かくて探題一色父子は海を渡つて長門に逃げ落ち少貳大友全く勢力を失つて屈服したので、頼

元は宮を奉じて久々に吉野の宮に参内することに決し、其事を後村上天皇に奏上したのである。正平十一年正月十七日後村上天皇は、今山某を使として女房奉書（御内勅）を五條良氏に賜はつたのである。其中に

宮の御方のぼり返すもめで度候。としの始の御よろこび只此事にて候。かやうに申沙汰返すもめで度候。併しながら父子の高名にて候。其よしよく沙汰せられ候べく候。

とあつて宮が九州を征服してお上りになる事を悦ばせられ、頼元父子が宮を擁護して九州を回復した勳功を御激賞になつてゐる。是程の偉功は他の勤王將士にも其類は稀なるものであらう。

又宮御上り候はゞ、少納言もくれぐれ参り候べきよしつたへられ候。

とし、宮の御上りの時には頼元も同行上洛するやうくれぐれも傳へよとの事である。此時頼元は既に七十歳の高齢であつた。

また

今は舊き人々心うつくしう候はず候、先皇の叡慮をもうけ給ひをきたるは、たゞ一人にて候つるとおぼしめされ候。

とあるは、吉野にては北畠親房既に歿して先帝に奉仕して叡慮を承はりたる人もなく、今は只頼元一人の外政治の中心ともなるべき元老もないので、天皇は五條父子の歸り來つて廟議に参ぜんこ

とを望ませられたのであらう。之によつても如何に後村上天皇の五條父子に對して御信任の厚かつたかは想像に餘りあることである。

併し此計畫は實現を見るに及ばず、遂に上洛の機を逸したのである。

かくて島津氏もまた官軍に歸順し、僅に畠山直顯が穆佐城に據て官方に背いてゐたが正平十三年には之も武光の爲に攻め落され、九國は征西府によつて統一されることゝなつた。



元來大友少貳の黨は鎌倉幕府以來武家方の家柄であり、尊氏又巧に利を以て懐柔したので、少貳氏は一色氏を驅逐せんため、島津氏は畠山氏を斃さんが爲めに、一時打算的歸順に過ぎなかつた。されば機に乗じ叛旗を翻すことは自然の勢であつた。

果然大友氏時は正平十三年豊後の高崎城に反逆の先鋒となり、少貳之に應じ、阿蘇惟澄の子惟村さへ官方に背いたのである。此頃北黨にては將軍宮を筑後宮又は鎮西宮と稱へ奉つて居た。

かくて正平十四年少貳軍は筑後平野に進出して將軍宮を奉じた菊池武光の軍と、筑後河畔大原（又大原ともいふ）の野に於て一大會戦を試みることゝなつた。頼山陽の「大舉來犯彼何人、誓剪滅之報天子」と詠じた筑後川の大戦は愈開始されたのである。

四、大保原の戦

正平十四年七月十九日亥の刻(午後十時)より夜陰に乘じ、菊池武光は手兵五千騎を率ゐて名にし負ふ筑後川を打渡つたので、少貳頼尙は陣を撤して、大保原に據り機を見て攻勢に轉じようと三十餘町退却した。

間もなく宮方の本據も筑後川を渡渉して宮瀬に進み第一線は岩田庄、福童原方面に進出して戦を挑んだ。

兩軍の對陣は旬餘に亘るも展開せず。太平記によれば兩陣の間隔は頗る切迫して旗の紋さへ鮮明に見えたといふ。武光が去ぬる正平八年古浦城こらふらで一色氏の爲に殆ど死地に陥つてゐた頼尙を救つた時、向後七代まで菊池に弓を引かじ矢を放たじと熊野の午王に血書した起請文を金銀にて日月を打つた旗の蟬本に懸けて頼尙を辱しめたといふ話は此時のことである。



かくて機は熟し、骰子は投げられた。

武光は奇兵を放つて敵兵を脅し、一方本隊を以て敵の先鋒を夜襲し、一舉して其中堅を粉碎し

ようと劃策したのである。

時は八月六日戌の刻(午後八時)弦月早や西に沈んで黑白あかぐらも分かぬ闇を探つて菊池二郎武政(武光の子)は、精兵三百を率ゐて旗を捲き冑を伏せて寶滿川に沿ひ、御原郡(今の三井郡)横隈附近に達し物蔭に身を潜めて本隊の到着を待つた。

本隊は其夜亥の刻(午後十一時)頃より運動を開始し、七千餘騎を分つて三隊とし河聲に紛れ大手より攻め寄せた。先陣には武光の甥片保田三郎武明の二千騎鎧袖相摩しつゝ前進すれば、第二陣は菊池孫次郎武信、赤星掃部助武貫の千五百騎、第三陣は大將肥後守武光の四千騎、第四陣は懷良親王の旗本三千餘騎、第五陣は新田一族の二千餘騎、右翼隊は八代の名和玉名の小野筑後の溝口等の五千五百騎、左翼隊は新田一族の一千騎部伍肅々として前進した。

戦は潜行の奇兵部隊によつて開始せられた。彼等の一部は機未だ熟せざる内敵兵に發見せられて止むを得ず、俄に喊聲を揚げ火を敵陣に放つて猛烈に突貫した。然も彼等は敵軍が頗る狼狽混亂して同志撃の醜態を極めた中を悠々として縦斷しつゝ我先鋒部隊と一緒になつた。

此勇敢なる奇兵隊中、我が筑後矢部村の住人木屋正行實等十八人は、天晴れ殊勳を立てたのである。

かゝる騒擾に乘じ宮方の先鋒武明は、敵の戦線に猛進突撃したので松浦原田の先陣は其氣勢に

吞まれて本隊さして退却した。

かくて夜はほの／＼と明け放れ、煙の如き朝靄の中に敵味方の旌旗がおぼろに現はれる。風腥く筑紫の野を吹いて殺氣天に満ち、劍戟の光は嘶く軍馬の聲と共に惨愴の色を漂はせて、修羅の巷は刻一刻と展開されて行く。

武明は先頭に馬を躍らして、敵陣に突進する。少貳新左衛門武藤之を見て「すはよき敵御参なれ遁がすものか」と六千の兵を三手に分ち武明を包圍した。されど少貳軍は武明の奮闘に辟易して退却した。

頼尙の嫡男新少貳直資之を見て大に怒り、手兵二千騎を率ゐて馳せ來り、武明に打ちかゝつたが事急にして備を立つる追なく、武明の爲に却つて撃退せられた。松浦吉種佐志將監も宇都宮隆房の爲に討取られ、直資齒嚙みして味方を勵まし奮戦したものゝ、此時從士僅に三十騎に過ぎず、遂に隆房に首を授けたのである。

直資の戦死を見た朝井將監胤信、筑後新左衛門頼信等奮然として官軍に殺到し來たので、片保田三郎武明を始め、城越前守等菊池の一族十一人郎黨百餘人見るまに枕を並べて戦死を遂げた。

第二陣にあつた菊池孫次郎武信、赤星掃部助武貫の一千餘騎は頼尙の甥太宰頼泰の陣地に向つて進撃した。敵勢は目に餘る二萬の大勢である。武信等は千五百の小勢を以て頼泰の五千の兵に當り武信の乳人岡上左馬助は頼泰と格闘して之を生擒した。

併し官軍にても赤星掃部助武貫を始めとして三百餘人戦死し、少貳軍また饗場右衛門藏人重高、山井三郎惟則等七百餘人を失つたのである。

宮には此戦況を傳し、親ら駿馬に鞭ち陣頭に立ちて頼尙の本陣に突撃せられた。

敵の諸將之を見て「將軍出でたり將軍出でたり射て落せ」と呼はりながら攻め寄せた。頼尙も陣頭に立つて兵を勵まし親王を包圍して流矢注ぐこと雨のやうであつた。

敵將城井常陸助冬綱二千五百の軍兵を麾いて親王に薄り奉る。冬綱の臣芳賀五郎房則恐れ多くも親王を射奉り、矢御鎧の側に當る。親王は身に三劍を負ひ給ひ流血淋漓として奮闘し給ふ。此時親王の御馬は射斃され、敵兵群り來つて危機一髪宛ら風前の燈のやうであつた。宇都宮隆房「すは大事なり」と身を挺して宮を護り、亂軍の中に戦死した。

宮の麾下たる五條頼元は其子良氏、良遠等と共に力の限り應戦したが扈從の諸卿も多くは敵刃に斃れ、死屍を亂して惨狀目もあてられず、近侍の人々も疲勞其極に達し、僅に親王を取り圍ん

で鎧の袖もて流矢を拒ぐばかりであつた。

宮も今は之までと刀を按じて觀念の眼を閉ぢ給はんとする一刹那、遙に人馬の響がして、驀然として一千の精兵西方より殺到した。これこそ新田一族の左翼隊で、今しも親王の御危難を見て俄に方向を變じて敵背に出で、親王を重圍の中よりお救ひ申したのである。

此戦に世良田大膳大夫、岩松相摸守を始とし桃井、堀口、江田の人々壯烈なる戦死を遂げ、親王は僅に一筋の血路を開き傷を包んで谷山右馬助(介)義隆(修)等の護衛で草野の谷山城に入らせられた。菊池武光は親王の危急を見て今はこれまでとある。何の爲に命を惜むべき「死ねや者共」と馬上に太刀を打振りつゝ士卒の先頭に立ち、子武政と群がる敵中に突進した。

少貳勢之を見て武光父子を射落せと鐵を描へて猛襲したのである。山陽の「被箭如蝟目背裂」とは此の有様を詠じたのである。

血戰縱横十七合、武光の馬は斃され背は破れ、髻切れて頭髮亂れ鮮血淋漓として面に濺き相貌赤羅刹のやうであつた「馬傷背破氣益奮斬敵取胃奪馬騎」とは此の壯烈の狀を叙したのである。

少貳新左衛門武藤之を見て「武光深手を負へり生擔るは今ぞ」と、單騎武光に肉薄し大手を擴げてむづと組む。

武光何なく組伏せて武藤の首をあげ、兜を取つて頭に被り又其馬を奪つて打跨り、頼尙の旗下

に向つて猛進した。官軍の士卒之を見て勇氣百倍し、縱横に斬り立てたので、頼尙支へ得ず花立山に據るべく馬首を東に轉ずると、少貳方の四萬の大軍は雪崩ゆたれを打つて總退却した。

かくて武光父子は官軍の諸隊を糾合して進撃に移つた。頼尙は僅に二十四騎を従へほうくゝの態にて寶滿の本城さして引上げた。

武光も亦部下の損害多きを見て一旦追撃を中止し、山隈原を流るゝ小川にて血刀を洗つたが、これがやがて太刀洗川として千載の後までも青史に芳名を残すことゝなつた。山陽の「歸來河水笑洗刀血迸奔湍噴紅雪」の名句は此場の光景を捉へたもので、今に人口に膾炙してゐる。

大 保 原 古 戦 場

乃 木 希 典

そのかみのちしほの色と見るまでに

紅葉ながるゝ太刀洗川

さて武光は諸軍を收めて高良山に歸陣し、尋いで居城隈府に凱旋した。

此接戦は八月六日丑の刻(夜午前二時)から七日の酉の刻(午後六時)に及び、十萬の鐵鎧が互に鎬を削つて雌雄を争つた鎮西唯一の大合戦で、兩軍の死傷二千五百に達したと傳へられてゐる。

明治四十四年十月福岡縣教育會三井郡支會は、金を醸して此激戦の中心地といふべき同郡小郡村字前伏まへぶせに「大原古戰場碑」を建立した。文は久留米の老儒江崎巽峯の撰する所である。

大正八年航空第四大隊(現今飛行第四聯隊と稱す)を此地に設置せられる時、其所屬飛行場に太刀洗の名を冠したのは此史蹟に因んだのである。

此戦は大義名分の上から、また戦争の壮烈な點から、九州にては未曾有のものであつて、武光の勇武は言ふ迄もなく、其精忠日月を貫いて千古の龜鑑といふべきものである。其献身殉國の精神は楠氏に比して少も遜色なく、吉野の朝廷は皇運日に衰へて南風競はざるの時、鎮西に於ける武家方を掃蕩して其根據を覆し、宮方の爲に大に氣を吐けるもの誠に痛快に堪へない。然も此龍攘虎搏の大壯舉が我筑後の野に行はれたことは感慨更に深いものがある。

況んや將軍の宮が長くも自ら陣頭に立ちて瀕死の境にあらせられたながら御奮闘遊されたのは正に父の帝の御負託を完うし給うたのである。其御偉勳を偲び奉るべきものは、今尙御陣址に遺れる南枝先づ綻ぶ將軍梅である。

明治十二年の頃有志者相謀つて、上妻郡(現今八女郡)矢部村御側山中に御尊骸を留め給うた後征西大將軍良成親王の英靈を慰め奉らんが爲、御井郡(現今三井郡)合川村宮盾の地に一小祠を建てたが、同二十一年十一月、社殿を同郡宮陣に遷し、同三十五年十一月、新に社殿を改築し、同四十四年九月には更に懷良親王

の神靈をも合祀した。是が現在の宮陣神社である。

此神社の境内に懷良親王敵軍と御對陣中、豫て尊崇し給へる阿彌陀佛の尊像を安置して、其手向にとて、親ら御植付遊された物(遍萬寺縁起)と傳へられたる淡紅梅の一老樹がある。幹枝様枒として大に繁茂して居る。明治三十三年十月大正天皇未だ東宮に在ませし時鶴駕を此地に枉げさせ給うて、社前に一松樹を御手栽遊ばされたが枝葉年毎に茂りて今は將軍梅と共に昔を偲び皇室の繁榮を壽ぐ記念の名木と仰がれる様になつた。

將軍梅

後藤東庵

六軍此地昔鷹揚

遺愛千年梅有香

飲慕南朝皇子蹟

土人不敢伐甘棠

將軍梅

東久世通禧

香をとめて昔のあとを偲びけり

いろもこぞめの梅の春風

五、征西府の極盛

大保原の戦は九州南北兩黨勢力の推移する分水嶺であつて、之より宮方の勢力は次第に振張して太宰府は官軍の手に落ち、洛中爲に震駭したと傳へられてゐる。

由來九州の地形は、自ら前三國（筑前・豊前・肥前）後三國（筑後・豊後・肥後）奥三國（日向・大隅・薩摩）に三分せられ、前三國の中心は筑前で、後三國の中心は肥後である。奥三國は肥薩の境に峻嶺が横はつて別世界をなし、大局に關すること極めて僅少である。従て武力筑前肥後を制する時は九州の大勢は定まるのである。

武光は戦捷の勢に乗じて少貳氏の根柢を衝き再起の餘地なからしめて宮の御在所を太宰府に移し征西府の基礎こゝに確立し、九州統治の實を擧げさせらるゝことゝなつた。

將軍足利義詮此形勢に驚き正平十六年斯波左京大夫氏經を九州探題として西下せしめた。然し宮方の勢力盛大にして武家方は全く氣息なく、從來九州探題の根柢地とせる筑前は官軍の有となり、島津氏亦氏經に好意を表せず氏經も手を束ねて施すべき策なく、さては大友氏時と結び少貳冬資をひき阿蘇惟村の力を借つて辛うじて幕府の權威を維持しようといふたに過ぎなかつた。

其後少貳冬資は筑前長者原及延打に武光と戦つて撃破せられ、大友氏時また武光の爲に高崎城に包圍せられ、九州の武家方悉く逼塞し探題氏經も歸東したのである。間もなく高崎城陥り、氏時捕虜となり、頼尙は土佐に氏時の子氏繼は周防に遁れ、九州は復殆ど宮方に統一せられた。

かくの如く征西府の威望が隆々として旭日の昇るが如く正平後半に於ける吉野朝史に光輝ある精彩を發揮せしめたことは、一に菊池一族の誠忠によるもので、其中心は武光であつた、只其活

躍の舞臺が西陲に偏した爲に、新田楠木に比し天下の耳目を惹くこと少なかつたことは遺憾といはねばならぬ。

義詮は九州官軍の勢力日に旺にして東上の噂さへ聞えたので安き心もなく、正平二十年五月澁川武藏守義行を九州探題として西下せしむることゝなつた。

義行は九州赴任の途に就いたものゝ、備後地方に滞在して徒に五年の歳月を過し、建徳元年には空しく歸洛した。伊豫の豪族河野通直が一族郎黨一千七百餘騎、船艦二百八十餘艘を率ゐて太宰府に抵り親王に伺候したのは此頃のことである。

正平二十二年十二月將軍義詮病歿し、其子義滿十歳にて後を繼いだので、將軍の宮は此機を逸せず東上の軍を起された。思ふに宮の御西下の大任は鎮西を平定の後九州の官軍を率ゐて東上し、京都の賊徒を掃蕩せらるゝのであつた。宮は此大目的に向つてあらゆる辛酸を嘗めて努力せられた。



これより先き將軍の宮には、御東上後に於ける武家方の復興を恐れ、後顧の憂を絶たんが爲め、別に征西大將軍宮の御差遣を請はれた。

かくして後の征西大將軍宮良成親王は御下向になつたのである。親王は後村上天皇第六の皇子

にましまして前征西大將軍宮の御甥君に當らせ給ひ、御西下の頃は五六歳の御幼齡であらせられ、供奉の人々は藤井、坊門などの人々で懷良親王御下向當時の如く、隱密の間に瀬戸内海を渡つて太宰府に着御あらせられたやうである。

五條良氏は大原合戦の翌年即ち正平十五年十月晦日肥後隈本に卒し、墓は八代悟眞寺にある。法號を無極宗觀といひ、其學力人格のいかに秀でて、吉野朝の信任深かつたかは前に述べた通りである。

良氏卒後頼元は二子良遠と共に親王を助けまゐらせて居たが、正平十八年良遠は正五位下に叙し兵部少輔に任ぜられ、頼元もまた筑前三奈木莊及日向飯肥南北兩郷の地頭職を授けられた。

爾來親王の御威勢益振ひ東上の日も近づきつゝあるを見て衷心喜に堪へなかつたけれど、老齡の故を以て太宰府を辭し此新恩の壯圖に退き二十年には出家して無礙宗性と號してゐた。

斯くて二十二年には三十年一日の如く匪躬の節を盡し身命を捧けて輔弼の任に當つた五條頼元は齡既に傾いて古稀を越ゆること八年の夏、さみだれ降りしきりて杜鵑血に啼く五月二十八日、筑前三奈木莊にて病を獲て逝いたのである。

頼元が叡山の行在所を辭し、哀痛の遺詔を奉じて終始渝らず、影の形に伴ふ如く、宮に従ひまゐらせ、反覆常なき武家を操縦統御して九國平定の偉功を奏したことは、中央に於ける北畠親房

に比し優るとも劣るまじく、其動功は正成義貞の如く華かならずとも、其純忠赤誠は幽谷の芝蘭の如く獨り苦節の芳芬を傳ふるものがある。然しながら常に帷幄の間に隠れて劃策經營し、裏面に潜んで功を人に譲る堅實なる性行は、動もすれば其實力を認めらるゝこと少く、近時其残れる斷翰零墨の古文書に依て漸く闡明されるに至つたのである。とまれ百難を排して艱苦と闘ひ、先帝の叡慮の一半を遂げ聖明に對へまつるを得たことは偉大なる功績といはねばならぬ。

されば頼元の没後、宮方の勢威頓に振はず今更ながら其人の力の如何に大なりしかと想望せられ宮に於かせられても御哀悼の情は一般君臣の關係と異り、痛切を極めさせられたこと、拜察されるのである。

正平二十三年二月懷良親王は菊池武光父子及島津伊東等九州勢七萬餘騎を率ゐて東征の途に上らせられた。

宮の御東征は細川氏が瀬戸内海の統制權を握り、大内義弘の家臣また五百艘の兵艦を以て其進路を遮つたので、舟師少き官軍は遂に大敗して豊前に退き宿年の志望も水泡に歸したのである。

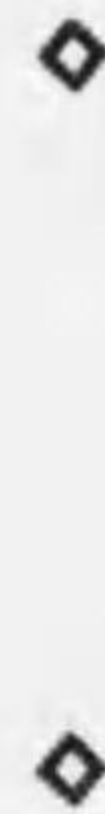
東上の御計畫失敗に終つたので宮は更に河野通直をして良成親王を奉じて四國經營の任に當らしめられた。

かゝる中に正平二十三年彌生の頃薰風ゆるやかに梢を吹いて一片二片散る花に春の衰れを覺ゆる十一日といふ日に天地に只一方と頼ませ給ひし御兄君、後村上天皇は住吉の行宮で崩御ましましたのである。

親王の御嘆きはいかばかりであつたらう、獨り都を隔てた西陲の一角に憂き月日を送らせながら一度は東上して龍顔を拜し今昔の思出に寂慮を慰め奉らんとおの思召も、今は只畫餅となり、行宮を護り奉つた忠勇義烈の士も相次いで世を去り、實に頼み少き人生の味氣なさを思召されては、御失望の程もさこそと拜察せられて悲痛の感に堪へない。

天皇御崩御の後吉野朝では朝臣武將の間に主戰媾和の論争あつて、楠木正儀の如きは媾和派として一族の反抗を受け足利氏に走り、政局頗る困難を極め、宮の御東上の御望もいよ／＼困難となつた。ましてや時變り人改まり見し世の姿は移ろひ行くまゝに今は只佛道三昧に入らせられてせめてもの心遣りとなされたのである。

正平二十四年父の帝の三十回聖忌には法華經一部を寫して阿蘇社に納め給ひ、又八月十六日の御忌辰には法華經八卷を寫して石清水八幡に捧げて御冥福を祈らせ給うたのである。



太宰府御在城十二年の間は、征西府の全盛時代で九國また靜謐であつた。不幸にして東上の御志は蹶跌したけれど、解脫の道にいそしませ給ひて少時は塵世の煩を忘れ給ひしこともあらう。此間に明使征西府を訪れたのである。

正平二十四年明の使節楊載博多に來り、太祖の即位を告げ倭寇を禁ぜられたき事を請うたが親王は書辭不遜であるとして卻けられた。翌建徳元年趙秩また來つて明の詔書を捧げて臣服を勧めた。親王は元寇の例を引き擲捨一番して之を斬らうとされたが、趙秩百方辯解して漸く歸國を許された。

其後僧祖闍克勤等八人また來つて大統曆文綺紗羅を贈り、佛教を説いて國人を服従させようと試みたけれど、親王は其野心を看破し、二年の間使僧を拘留せられた。

此史實は支那一流の筆法にて書かれた明史に見えた事として其真相は明でないとするも、親王の明使に對し給へる毅然たる御決心と強硬なる御態度とは躍如として眼前に現はれてゐる。

とにかく南北分争三十餘年、世は兵亂の巷となりて、國力疲弊せる時、僅に九州の兵を擁しながら海外新興の大國に向つて、去にし文永弘安の際快男子時宗が元使を一喝せし如き大膽なる措置を取られて皇威を墜されなかつたのは、實に光彩陸離たる御偉勳といはねばならぬ。之を彼の義滿が明の封冊を受けて臣事した醜態に比したら天壤の差といふべく、頼山陽は當時の事を「嘗

卻明使壯本朝。豈與恭獻同日語」と嘆賞して居る。

六、高良山御陣

建徳二年如月十九日、都はまだ雪深く軒のつらゝも解けやらぬに九州探題伊豫守貞世入道了俊は鎮西統一の任を帯び弟仲秋子義範を従へ九州下向の途に就いた。

彼は太宰府の占領を目的とし、其子義範をして大友氏と共に豊後より菊池氏を襲はしめ、弟仲秋をして肥前より松浦黨を率ゐて太宰府を攻めしめ、自ら豊前より進入して太宰府を侵し征西府を覆すべき籌策を立てた。

義範は建徳二年九月二日豊後に着し、仲秋は十一月十九日肥前松浦に上陸し、了俊は十二月十日九日門司に渡つたのである。其間武光は豊後高崎城に義範と戦ひ、武政は肥前小城烏帽子嶽に仲秋と會戦したが戦利あらず、翌文中元年三月には了俊は諸將を率ゐて那珂郡高宮に陣し、次いで太宰府の北方佐野山に移り、周到なる用意を以て太宰府攻撃の機を待つた。

かくて八月に入り了俊及仲秋によつて太宰府の總攻撃が開始された。太宰府占領の一舉は兩軍興廢の決する處とて、いづれも奮闘に力めたものゝ天、宮方に幸せずして、十日に天拜山城陥り、十一日に有智山城また敵手に委し、十二日には太宰府全く今川の手に落ち、菊池軍は恨を呑んで

北風に靡く筑紫野の草踏みしだきて高良山に引上げた。



文中元年八月太宰府陥落後の征西府は筑後高良山に移り茲處少時官軍の策源地となつた。高良山は筑後平野の高峯で、西北に筑後川を控へ軍事上頗る重要な地點である。宮は此要害によつて敵の南下を拒ぎ、肥後筑後等の連絡を固くし、肥前に進出し、敵勢を挫き太宰府を恢復するの策戦を講ぜられたのである。

此間に菊池武光は文中二年に病歿し、さらでだに孤城落日の悲境に立てる宮方には失望落膽の程思ひやられて悲痛の至である。

太宰府陥落後武光の名史上に見えずして、武政専ら軍機を掌れるにより太宰府争奪戦中に陣歿したのであるまいか、との説もある。阿蘇文書に文中二年の三月に、武光が筑前松本城進出の聞えありしことが見えてゐるから病歿であらうと思はれる。いづれにせよ武光が南征北伐數十年君國に盡した偉業は日星の如く後世に輝き今更ながら其死が惜まるゝ。

武光に次いで武政軍務を處理し、文中二年には肥前本折、所隈の諸城を襲うて今川氏の南侵を防ぎしも、大勢已に去つて太宰府恢復の望全く絶え、一旦歸服せし諸族も次第に離散し武政の苦

心焦慮は言語に絶するものがあつた。

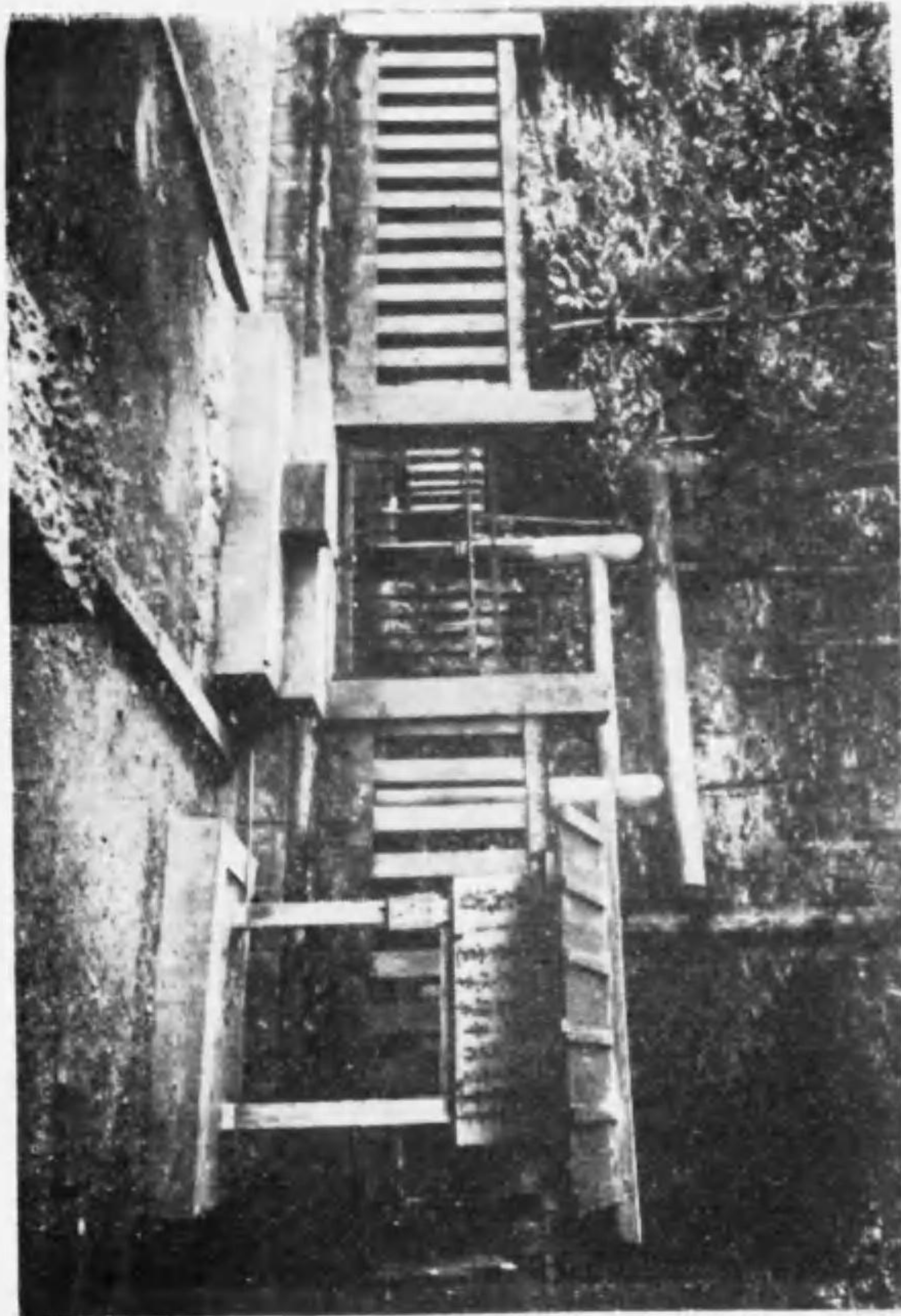
文中三年には今川了俊は愈侵略の歩を進めて其將山内通忠は五月六日に筑後川の小田瀬を渡つて生葉に侵入した。それより兩軍の交戦日々繼續されたが、武政は此戦に重傷を負ひ、五月二十六日暗雲低迷して山禽亂れ啼く高良山の陣營に、三十三歳の壯齡を以て父の跡を追うたのである。

武政の歿した時、嗣子賀々丸纔に十二歳であつた。賀々丸は後の武朝である。

武時の末子武義、武光の甥武安之を輔佐して防禦の任を盡したものの、時勢日に非にして士氣沮喪するのみである。況んや今川了俊は學識才幹すぐれ、遠大なる劃策の下に辣腕を振つたので、烏津氏を始め筑肥の諸族今は悉く武家方となつた。

かくて文中三年八月より九月にかけての福童原の戦に、賀々丸の軍破れてより、形勢愈振はず、今川軍は今や筑後川を渡りて一舉して宮方の根據を衝かんとするの狀勢となり、賀々丸、武義、武安等は遂に高良山の陣を撤し、懷良親王を奉じて肥後隈部城（隈府）に退却した。高良山の御在城二ヶ年を思へば悲風浙瀝として御心安まる遠なき御在所であつた。

今川了俊は高良山を陥れると、戦勝の餘威を驅つて黒木城を陥れ、谷川に陣し、天授元年三月には邊春越にて山鹿を過ぎ、肥後菊池に侵入した。この頃良成親王は四國より還御あつて菊池城にましましたが、當年十四歳の賀々丸は一族を擧げて一意君國の爲めに忠節を勵んでゐた。



後西將軍成親親王御墓



(後龜山天皇御製)

我宿とたのますながら吉野山

花

になれぬる春もいくとせ

七、矢部の御幽栖

懷良親王は天授元年の夏征西將軍職を良成親王に譲らせられ、ほどなく筑後上妻郡矢部山中に遷らせられた。これ頼元の子良遠が當時矢部に住してゐたため之を頼ませられての御事と察せられる。此寂しき深山幽谷の間に七八年の春秋を送らせ給うたのである。

總じて矢部の地は、前に黒木氏があり、後に阿蘇氏があり、菊池には間道から連絡し、星野、木屋等宮方のもの少からぬ、洵に地の利を得た天險である。天授三年肥前蜷打にまうちの戦後には今川了俊筑後に侵入し、善導寺より親王の矢部に在すと聞き、攻め奉らんとせしも山深く要害堅固なればとて上妻方面に去つたとのことである。

蜷打、白木原しらかばらさては託摩原の激戦に世は麻の如く亂れ騒げども、此處矢部山中の天地は風和かに月澄みてせせらきの音すら高からずいと物靜であつた。

宮は矢部の奥築足ツキアシ(月足)の五條館に籠りましまして五十年の夢の跡など思し出されて無限の

御哀愁は潮の如く湧き出でさせられたであらう。寂々たる空山の裡、日々讀經三昧に送らせ給ひ、松籟湍聲は屢冷かなる夜半の御夢を破つて御心を惱まされたことであらう。

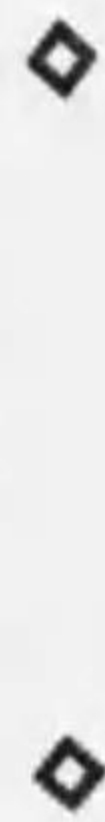
天授三年二月九日には、高良下宮の社に御願文を納められた。九州の擾亂を鎮定し萬民の苦患に惱めるを救はんことを祈られ、且社壇が灰燼に歸し寶輿の穢れたるを慨かせられ造營の功を遂げん爲筑前國富永莊地頭職を寄進せられたのである。

然も御願文には「九州の治亂一度にあらず、萬民の艱苦休む時なし。末世の救ひ難きを愁ふと雖も責は一人の無徳に歸す。過を悔いて餘あり、咎を謝して足らず」と仰せられてゐる。義は君臣にして情は父子に等しき御仁徳洵に感泣の至りである。

宮の高良玉垂宮御尊信は正平三年法華經普門品を寄進されてより、正平十七年七月一日には高良山に參詣せられ、肥前光淨寺の僧自空に令旨を賜ひ、同二十年四月二十一日再び高良山に詣でられたので分る。建徳元年十二月十三日には菊池武安は宮に啓聞して筑後三潯郡大善寺村高良玉垂宮繪縁起を修補してゐる。かくも兵馬惶惚の間に貴賤の合力を得て自ら大檀那となり修補の功を了へたのは當時にあつては稀に見る文化運動として特筆すべきものであらう。此の丹青の妙を極めた絹本着色の大畫幅二軸は國寶として今に大善寺の縣社玉垂宮に現存してゐる。

天授四年の春には、御母靈照院禪尼の爲に梵網經戒品の妙文を寫し給ひ、寫經看經の御隙には

日向神の奥を訪ねて詩囊を肥やさせ給ひ、或は黒木に下つて勤王の兵などを勵まさせ給うたのであらう。



此頃御兄君宗良親王は往時を偲びて吉野三代の帝の御製を始め宮方に縁ある人々の歌を集めて新葉和歌集を撰し給ふなど敷島の道にも秀でさせられてあつた。

そこで建徳二年九月には征西大將軍宮は左の御述懐を兄の宮に贈らせられたことがある。

日にそへてのがれんとのみ思ふ身に

いとようき世のことしげきかな

知るやいかに世を秋風の吹くからに

露もとまらぬ我が心かな

此歌が十二月に宗良親王の許に着した。そこで親王は

とにかくに道ある君が御世ならば

ことしげくとも誰かまどはむ

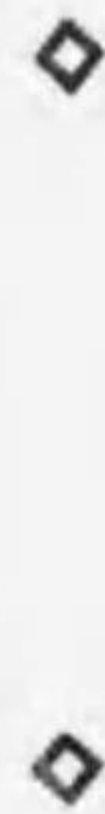
草も木も靡くとぞきく此頃の

と御返歌遊ばされた。

世を秋風となげかさらなむ

當時宮の御武運は尙盛なりしもの、御東上の機いつと期しがたく宮の御心には木の葉いみじく亂れ散りて露もとまらぬ御思ひ遊ばしたことであらう。さるにしても兄君が鎮西の御盛運を稱へて弟君の御衷情を勞らせ給せへる美しき御友情のほど畏さの極である。

然るに今は戦雲頻りに動きて、雁の便も杜絶え勝で侘しき深山の御住居さこそと推し奉らるゝにまして弘和の頃には名和、相良の一族朋黨を結んで良成親王及菊池武朝を將軍の宮に讒訴したので宮の御氣色穩かならぬものがあつて暗愴たる鎮西の前途に對して痛く御悲觀遊ばされたことゝ思はれる。



かゝる中に弘和二年の秋の頃より御いたづきにかゝらせられ、五條良遠専ら御側に侍りて看護し奉り心を碎きしも、山間の僻地とて庸醫も御心に任せられず、竹の園生の尊き御身ながら回生起死の御靈藥もなく、御惱は日に日に重らせられ弘和三年の彌生二十七日、狂風春を吹いて慌たゞしく散る花に無限の憾を留めつゝかくれましたのである。近侍の人々殊に良遠、頼治の悲

嘆は申すまでもなく、傳へ承つた宮方の人々は定めて悲痛の暗涙に咽んだことであらう。あはれ鎮西統一の大業も只一場の夢と消えて、殘し給ひし御水薫僅に昔を偲ぶよすがとなり、風は寂しく日は落ちて春愁綿々として盡きないのである。

薨去後御遺骸を何處に歛め奉つたかは詳でない。當時は戦陣の間とて御葬儀は隱密の間に行はれ五條氏亦各地に轉々して居た爲に、今日に至るまで疑問となつてゐるのである。

維新後考覈の結果八代郡宮地村中宮谷の古墳を御墓と定められ、明治十一年四月宮内省より指定せられ、同十三年八月三日八代城址に親王を祀り八代宮と稱し官幣中社に列せられた。

さて十一月十一日付にて五條宗金(良遠)の河野刑部大輔(通直)に贈れる書狀に宮の御惱のため專使をまゐらせたことを謝し、弘和三年四月十七日到来せる良成親王より五條氏に與へられた四月十四日付の御自筆狀に「大御所御事菟角中々無申計候」とあるは明に薨去の事を知り給ひし後の御狀と拜察せられる。從て豊後萬壽寺過去帳に御薨去の日を弘和三年三月二十七日とせるは根據ある説といふべきである。

さすれば宮の御終焉地は八女郡矢部のやうにも思はれるが、其御墳墓と認むべきもの今に見當らず、其傳説地には肥後上益城郡水越村、豊前中津町東寒宿雲雀の床、豊後日田の西高瀬村の普聞寺、筑後三井郡山本村柳坂千光寺、八女郡星野村の麻生上小野、或は矢部村の奥、虎伏木等がある。

千光寺は後鳥羽天皇の御宇草野永平が千光國師を請して開山せし著名の禪刹で、古來大保原合戦に御負傷後幾何もなく、あへなくならせ給うた親王の御遺骸を葬り奉つた處であるとの傳説が遺つて居る。かねて神佛を御尊信遊ばされた親王は、高良山御在城中時折は程遠からね此寺に御行遊あらせられたものと思はれる。されば宮の御筆と稱する普門品の寫經が今も同寺に秘藏せられてある。弘和三年親王が矢部の深山の花と散り給うた時、宮方の忠臣草野永幸か若くは其子孫が、御尊骸又は御分骨を大保原戦争前の陣營地であり又御創を療養し給うたといふ谷山城の下なる千光寺の裏山に歛め奉つたものと思はれる。

遊千光寺

松下雪堂

巖徑移筇惜蘇紋

洞門高踏翠微雲

茲基入宋老禪伯

有慕征西舊將軍

山壓蒼牙花淡々

渠環堂頰水沄々

曾遊主伴今誰在

長嘯盤徊欲夕暉

(註曰) 山有古墳相傳征西將軍良懷王之陵墓也

雪堂は元祿時代に於ける久留米の學者である。

爾來春風秋雨幾百年無言の寶篋院塔は空しく苦むして松籟獨り古を弔ふ有様であつたが、今より約百七八十年前、時の藩主有馬頼徳特に畏敬の意を表せられたので、士民ます／＼尊崇の念を厚うして此の靈域の修理保存に力を盡し、天下の志士及び學生等の來拜する者も亦少くないやうになつた。猶親王の王妃王子等に就いては何等の徵證なく、菊池武重の妹御妃となつたと傳ふるものや、王子は後寺僧となられ、今の矢部村莊嚴寺の先代は其裔孫などの傳説もあるが、いづれも根據となるべき史料なく、血肉の御跡尋ねるに由なく誠に痛恨に堪へない。

八、大柚の御所

記者は先年矢部大淵に五條家を尋ね、築足に古城廢寺の跡を探り、紺青のやうに美しい水と削るが如き漆黒な巨岩に見とれながら宮尾の山村につき、それより五條氏の高屋城址たる城山に登つたことがある。

徑なき叢を踏み分けて葛にすがり岩を攀ぢ辛うじて山頂に達した頃は樹の間洩る夕日の影も薄れ行きて時雨を催す斷雲の徂徠も慌しかつた。

山上は狭長い百歩程の平地となり、其あたりには自然の岩石を利用して防壘とした痕が見える。見渡せば峯巒迫つて谿谷帯の如く、矢部街道は縷々とした溪流の間を縫ひ、來往の人馬豆の如く

點々として指顧の間にある。

然も此地は肥筑豊三國の境で矢部川に沿ひ、南は山鹿菊池に、東は豊後の日田に接し、五里の險壑を下つて大淵に至る。更に下ること三里、黒木谷に達する。こゝには黒木定善の據つた猫尾城がある。之より山麓を括るが如き一條の矢部川峽をなして八女の平野に至り、左右の山兩翼を張つて右は高良山、左は三池山に連り、星野谿は又其後を繞つて居る。所謂五條氏中心となり菊池氏背を守り黒木氏其前を守り、星野氏又妙見城に據つて日田の通路を扼し、洵に九州唯一の天險の地である。然も土豪には醇朴忠良なる栗原、築足、大淵の諸族五條氏に仕へ、黒木、星野、木屋の諸族五條氏の羽翼となつて宮を擁護した。夫でこそ五條氏が征西大將軍の宮を奉じて敵の隻騎だに近けざりし真相が實にもと頷かれる。



良成親王が菊池陥り、宇土、八代また敵手に入り、頼む木蔭に雨もりて矢部の奥に迎らせ給ひしは良遠既に老いて其子左馬頭頼治父祖の衣鉢を受け、彈丸黒子の地に落日を支へて孤忠を抽んでし時であつた。宮は元中八年九月最後の御在所を大柚の奥に定めて、少時安靜の休養小天地を得られたのである。

宮は前にも言へる如く、正平の帝の第六皇子に渡らせられ襁褓の中に遙けき筑紫路に下らせられた。正平十四年には、叔父君東上の途を安らかにせんとて、四國御征伐の任に當り給ひ、天授元年征西將軍職を繼がせられ同三年千布蟻打の戦には十六七の御若年にて自ら矢面に立ちて御奮闘遊ばされた。不幸にして軍破れて菊池の宿將多く戦歿し、白木原の戦亦利あらず、同四年託摩ヶ原の戦には雄々しくも馬を躍らせて敵の麾下に肉薄し、大捷を得させられたけれど、時運日に非にして南山また朝臣武將の間に内訌絶えず、皇威益々衰ふるのみであつた。

かくて敵將今川了俊は兵を構へて菊池諸城の糧道を絶ち次第に攻め寄せたので、弘和元年六月には菊池の本據たる隈部、染土の城陥り、宮は風雨を冒して「たけ」の御所に遁れ給ひ、次いで宇土に八代にと遷御になつたのである。

元中四年十月宮が宇土に在せし時、由利信濃守を御使として大淵村築足なる五條頼治に御劍を賜ひ、また屢懇勸な御書を賜ひて山中の状況又は學問や歌道の事など何くれとなく問はせ給うた事もある。かゝる御眷顧を忝うしたことは遠く四國肥後御陪從の頃に始まつたものと思はれる。

頼治は良遠老いて後は親王に離れまゐらせ矢部の奥に籠りしものと見え、良遠の病みし時には宮は頼治に御書を下され祈禱療養に力を盡すべく、特に椿原の僧に祈禱を命ずべきよし告げさせられ其卒去の折には哀悼の特使を送らせられた。

此頃了俊は八代を陥れてより官軍の根據地は只矢部のみであるから此機に乗じて攻め落さんとて矢部攻略の計畫を立てたのである。

かくて元中八年十月には、大友親世の一族次郎親氏及如法寺氏治は大舉して筑豊方面より進入したが、頼治は黒木四郎（定善の孫）等の官方を糾合して撃退したので親王は優渥なる感狀を賜ひ武功專一と御稱讚になつたのである。事は十二月九日付の頼治言上書に盡されてゐる。

元中九年十月には、武家方の威風盛にして官方の勢力全く蹙り、苦楚三十年の御はかりことも今は其甲斐なく御憤慨の餘元中の號を改め給はず、令旨を發して勤王の士を激勵あらせられた。

應永二年（元中十二年）大友の一族道徹、矢部に侵入したので頼治粉骨碎身して之を撃退し、五條氏の文勳の上に更に武功を輝かし、所謂錦上花を添へたのである。

道徹退散、大慶此事に候。當山の名譽彌超過たるべく候歟。就中計策と云ひ粉骨と云ひ、旁以て痛敷存候つ。其功定めて期する所あるべく候哉。感悅の至筆端に盡し難く候。參の時を期し候也

十月廿日

五條左馬頭殿

（裏書）御在所矢部大袖

然も之れ史上に残れる官方最後の奮闘で、其後杳として宮の御消息絶え、薨去の時日さては皇妃皇子の御在所さへ知るに由ないのは如何に亂世とは申しながら洵に恐懼の至りである。

御筆 元中十二年十月二十日

五條家譜には頼治は大淵村月足に住み、矢部高屋城を守る。法號珠山宗剛、此人忠貞義烈、隆盛家之中宗と稱すべしとある。然して應永十年三月大淵に熊野宮を建立せる記事あるも、卒去の日は詳かならず、爾來良量頼經良興を経て良邦に傳へ小豪族として矢部山中に超然と時代を離れて他の侵略を免れたのである。

さるにつけても親王には如何おはしませしか。僅に頼治の手記した御書の裏書に御在所大袖とあるによつて其御幽栖の地を知り得たに過ぎない。

大 袖 山 船 曳 鐵 門

五百世經て仰ぐも高し大袖や

をそまの御城のその跡どころ

由來九州の吉野とも稱すべき大袖の地は、御側川の細流に沿ひて上ること二里餘の處で、山高

く谷深く、耕すべき地もなく、一條の樵路僅に通じ、東は豊後津江に西大淵に通ずるのみであつた。御墓の塋域周圍一百四十間である。今に龍顔の峰、御靈舎、王の上、王の下、公卿坂、馬場野、見參平等の地名があつて、御靈舎は御所の址と稱へ、三水の井とて宮の御用水であつたといふ清水湧き出づる處がある。恐らく宮は此處に在して御一生を終らせ給うたのであらうと拜察される。そのいくそばくの春秋の間、佗しい御在所にて千草にすだく蟲の音裂帛の如き穢の叫び、さては岩に泌み入る河鹿の聲など、銷魂の種とならせ給うたのであらう。

今も五條家に遺し給へる御水莖の跡など拜し奉れば、猷勁の中に温雅の趣あつて、文に武に御堪能にあらせられた御氣品の程も窺はれる。

御墓は明治に至る迄蓬草離々として今は傍に取除かれた釋迦堂が其上にあつたといふ。御墓の下には江口姓の民家があつて、毎年十月八日を御命日として御回向申上げて居たといひ、里のうなる子も「オウサマ」の御墓といつて、堂上には昇らなかつたといふ。今に此地方に矢部の公卿歌といふのが遺つて五百年の餘韻を留めて、懐古の情を新にするものがある。



宮の御墳墓を發見したのは柳河の藩儒牧園茅山（猪）である。彼はまた豊後萬壽寺の過去帳中

に前征西大將軍宮懷良親王御薨去の忌辰を見出したのである。

其著書「行在或問」は楠木正儀の爲に寃を辯し五條、名和、新田の遺裔を顯彰してゐる。文化十四年の彼の詩に

大柚奉_ニ謁征西將軍良成親王祠堂_一

大王蹤跡久尋求_ク 求得遺文來謁丘_ニ

古木小堂蕭寂甚_シ 元中幽隱使人愁_ム

といふのがある。文献によつて宮の御墓を世に紹介したのは蓋し之が嚆矢であらう。

明治十年高良神社の權宮司船曳鐵門が大柚御所及御墓を此地と斷定して上申せる結果、十一年五月宮内省より正式に御墓の指定があつた。

かくて明治二十六年には北白川宮殿下親しく此の奥津城に詣で、吉野櫻を御手植あらせられ、近くは昭和四年の春閑院宮殿下また御參拜あそばされて、宮の御遺風は咲き亂れたる満山の花と共に長へに千載の後までも香に匂ふであらう。

大柚の御奥津城に詣で、

江藤正澄

武夫の矢部の深山の山櫻

ちりにし君が昔をぞ思ふ

九、結 び

後龜山天皇は京都に御還幸遊され。征西大將軍宮は大袖の奥にてかくれまじませしも、五條、菊池の兩家はなほ依然として吉野朝の正朔を奉じあらゆる艱難に處しながら西陲の一角に苦節を守つてゐた。

五條家は頼治の後良量以降依然として矢部山中にあつて舊領を襲ひ、十二代鎮定の頃領地を放れて豊後に遷り肥後八代に住み、統康の時矢部氏と改めてゐる十四代長安の時寛永三年柳河藩主立花宗茂賓禮を以て肥後より招き矢部の舊領を與へた。爾後山筒役となり當主頼次男爵まで二十三代連綿として今日に及んでゐる。

明治二十年久米博士は、五條家を訪れて史料を採訪し、更に其文書は修史局にて謄寫せられ、今は立派に装幀せられて十六卷の軸物となつて居る。それには後醍醐天皇の御遺詔を始め、後村上、後龜山兩帝の綸旨内勅前後兩將軍宮の令宮旨御書其他四條隆資、菊池諸將の書狀等及戰國時代より寛永に至る諸家の文書三百六十五通を收めてゐる。

其他同家には後醍醐天皇より御下賜あらせられた金烏の御旗や、良成親王の召されし御鎧頼元の甲冑等を藏してゐる。

結

び

殊に親王の御鎧は王矩鶴に乗るの圖が描かれた優美典雅なものであり、頼元の用ひた兜は大原戦役の際受けたといふ矢創の痕さへ残つて居る。

かくて明治三十年七月一日朝廷頼元の勳功を嘉せられ二十二代頼定に特旨を以て男爵を授けて華族に列せしめられ、明治四十四年十一月頼元に正四位、頼治に従四位を贈り給ひ天恩枯骨に及んだのである。

要するに我筑後を根據地として皇國の爲にあらゆる辛酸を嘗めて、苦戰奮闘遊ばされた兩將軍宮の御活躍は申す迄もなく、五條、菊池其他の志士がよく宮を擁護して累世忠節を抽んでた事は、我國史を飾る最も精彩に富んだ頁である。然も五條氏は政務の總理で參謀長を兼ねたといふべく、菊池氏は三軍を統率する軍司令官と見るべきであらう。

五條氏の九州に於ける位置は吉野朝に於ける北畠氏に比し少しも軒輊はないが、只其舞臺が鎮西の僻陬にあつた爲に其功績のさまで著はれなかつたことは多大の恨事と言はねばならぬ。

我國はすめら御國で臣民は萬世一系の皇室を宗家と仰ぎ、天壤無窮の皇運を扶翼すべき國體であるから、天皇は國家と一體で忠孝は一本である。菊池、五條の人々が此國體觀念の下に皇室尊

崇の大旗を押し立て、最後まで殉國の精神を維持したことは國史の華といふべく、更に此主將等と共に王事に鞠躬盡瘁した黒木、星野、木屋、草野氏等の事績は、吾等子孫の模範として、大に學ぶべきものである。

然して是等先人の足跡を残せる矢部、大保原、さては高良山をかけた山川林落の一木一石にも、そこには必ずや意義ある教訓と感激の何物かが含まれて居るであらう。我等は此史的自然に對しつゝまじき敬虔の心の聲を己れの内に聽き、三千年來最も矜るべき傳統的國民精神を擱んで新しい人生に活きたいと思ふのである。

(宗良親王御歌)

君のため世のため何か惜しからむ

すてゝかひある命なりせば

一〇、附 録 年 表

附 録 年 表

- 延元元年(一九九六)二月 菊池武敏高良山に陣す。大宰府有智山城の戦。
- 三月 多々良濱の戦。
- 五月 菊池武敏仁木義長と床河に戦ふ。
- 九月十八日 後醍醐天皇征西大將軍の任命を九州の諸族に告げ給ふ。
- 十二月 後醍醐天皇吉野遷幸。
- 延元三年(一九九八)九月 菊池竹重大友氏時と高良山に戦ふ。
- 十月 一色範氏高良山に陣す。
- 延元四年(一九九九)六月廿四日 五條頼元懷良應王の九州へ御出發あらせらるゝことを惠良惟澄に豫報す。
- 八月十五日 後醍醐天皇九州御委任の遺勅を頼元に賜ひて九州の事を託し給ふ。
- 八月十六日 後醍醐天皇崩御。
- 興國三年(二〇〇二)五月 懷良親王薩摩に着御。
- 興國四年(二〇〇三)五月 一色範氏竹井城を攻む。十月竹井城陷落。

興國五年(二〇〇四)閏二月廿一日 頼元惟澄に懷良親王肥後入御後に於ける行賞を約す。
 正平二年(二〇〇七)六月廿四日 頼元書を惟澄に與へて九州將士恩賞の事を吉野に奏すべきを告げ其出兵を促す。
 十一月廿四日 懷良親王頼元をして惟時に二子戦死の賞及社領安堵の事を諭して歸降を勧め給ふ。
 十二月一日 頼元惟澄をして奉迎の人を進めしむ。
 十二月十四日 懷良親王肥後入御の御途上より五條良氏をして惟澄を召さしめ給ふ。
 正平三年(二〇〇八)正月二日 懷良親王宇土御上陸。
 正月八日 頼元懷良親王の旨を受けて惟時に諭す。
 正月十二日 頼元惟時に來り候せんことを勸む。
 正月十九日 懷良親王筑後を撃たんとせられ惟時を召し給ふ。
 二月廿三日 頼元惟澄を促して筑後發向の軍に會せしむ。
 四月 懷良親王法華經普門品を寫して筑後高良山玉垂宮に納め給ふ。
 六月廿三日 頼元惟澄に請ふ所の日向の事は懷良親王に啓すべきを告ぐ。
 九月廿六日 懷良親王筑後御征伐のため菊池武光を肥後南郷に遣して兵を催さしめ且つ惟澄の

兵を召し給ふ。
 正平四年(二〇〇九)九月十八日 惟澄頼元に日向守護職及將士恩賞の事を請ふ。
 正平六年(二〇一一)九月廿九日 一色範氏等少貳頼尙と筑後河北床河に戦ふ。
 十月 懷良親王頼元武光等を率ゐて菊池を出で給ひ惠良惟雄等をして關城を陥れしめ、尋いで筑後潮高に御在陣進んで筑後國府に入り給ふ。
 正平八年(二〇一三)正月 草野永幸菊池軍に従ひ一色範光を肥前千栗、船隈に攻む。
 二月 菊池武光等の援兵古浦城にて一色氏の爲に苦められたる少貳頼尙を救ふ。
 四月五日 懷良親王高良山御陣。
 七月 草野永幸武光に従ひ肥前朝井、仁比山の一色軍を破る。
 正平九年(二〇一四)十月 草野永幸木屋行實等菊池軍に従ひ筑前千手城に一色範光を攻む。
 正平十年(二〇一五)八月十八日 懷良親王肥前征伐の爲菊池を出でやがて國府に入り給ふ。
 正平十一年(二〇一六)八月七日 筑前志摩郡桑原莊を木屋行實に賜ふ。
 正平十二年(二〇一七)七月 懷良親王武光をして木屋行實が領せる筑前桑原莊の違亂を停めしめ給ふ。
 正平十四年(二〇一九)三月 懷良親王武光等を率ゐる大友氏時征伐に向はせらる。

四月 少貳頼尙叛して太宰府を發す。

七月十九日 懷良親王頼尙を撃たんとして筑後川を渡り給ふ。

八月六日 懷良親王武光頼元等を率ゐて頼尙と大保原に戦ひ給ふ。

(三井郡千光寺過去帳及び遍萬寺の縁起には延文四己亥年(正平十四年)八月十八日懷良親王薨去と誌されたり)

正平十五年(二〇二〇)十月晦日 五條良氏卒す。

正平十六年(二〇二一)七月十七日 懷良親王武光等を率ゐて筑前長島山に出御。

八月七日 懷良親王武光をして大友氏時、少貳冬資を青柳に討たしめ尋いで御在所を太宰府に移させ給ふ。

是歲頃 良成親王御降誕

正平十七年(二〇二二)七月一日 懷良親王高良山に御參詣あり自空に令旨を賜ふ。

正平十八年(二〇二三)九月九日 頼元に筑前三奈木莊及日向飢肥地頭職を賜ふ。

正平二十年(二〇二五)四月十九日 懷良親王太宰府に陣し給ふ。

四月廿一日 懷良親王筑後高良山に詣せらる。

正平廿一年(二〇二六) 良成親王九州に着し給ふ。

正平廿二年(二〇二七)五月廿八日 頼元筑前三奈木に卒す。

正平廿三年(二〇二八)三月十一日 後村上天皇崩御、長慶天皇踐祚。

正平廿四年(二〇二九) 明主朱元璋楊載を遣し懷良親王に謁し倭寇を禁せんことを請ふ。

五月三日 懷良親王妙法蓮華經を寫して阿蘇社に御奉納あらせらる。

八月十六日 懷良親王父帝の聖忌を迎へ法華經を書寫して石清水八幡宮に納め御冥福を薦め給ふ。

十一月 懷良親王博多承天寺に御座あり。

十二月三日 菊池菊童に命じて高良社造營段錢を安樂寺領に徴することなからしめ給ふ。

十二月十三日 良成親王將に四國を征し給はんとす。

建徳元年(二〇三〇)三月 明使趙秩來り懷良親王に謁す、親王之を斬らんとし給ふ。

十二月十三日 菊池武安懷良親王に啓して三瀧郡大善寺村玉垂宮繪縁起を修補す。

建徳二年(二〇三一)九月廿日 懷良親王和歌二首を宗良親王に贈り給ふ。

文中元年(二〇三二)正月三日 武光高崎城より太宰府に退く。

八月十二日 太宰府陥り懷良親王武光と共に高良山に逃れ給ふ。

文中二年(二〇三三)八月二日(?) 長慶天皇御讓位、後龜山天皇踐祚。

十一月十六日 菊池武光卒す。
 文中三年(二〇三四)五月廿六日 菊池武政高良山(?)に卒す。
 八月三日 今川了俊官軍の筑後川を渡らんとするを聞き進みて筑後福童原に陣す。
 九月十七日 筑後高良山の御陣支へ難く菊池賀々丸懐良親王を奉じて肥後に還る。
 天授元年(二〇三五)五月六日 是より先良成親王四國より還御あり是日既に懐良親王と共に菊池に御在城。
 是夏頃 懐良親王征西將軍職を良成親王に譲り給ふ。
 十一月三日 曩に泉涌寺より懐良親王に奉りし佛舍利を五條良遠に授け給ふ。
 天授二年(二〇三六)是夏 良成親王菊池武興、阿蘇惟武等を率ゐ、肥前國府に兵を進め給ふ。
 十月十三日 良成親王肥前小城郡西方地頭職及筑前國下座郡平塚名等の地を惟武に賜ふ。
 天授三年(二〇三七)二月九日 懐良親王筑前富永莊地頭職を高良玉垂宮に寄附し九州の平定と王家衰運の恢復とを祈り給ふ。
 三月 是より先懐良親王筑後矢部に入御あり了俊來りて之を攻め奉らんとす。
 天授四年(二〇三八)三月廿九日 懐良親王御母靈照院禪尼の爲梵網經戒品を寫し給ふ。
 九月廿九日 良成親王武朝を率ゐて肥後託摩原に了俊の軍と戦ひ、遂に之を破り給ふ。

弘和元年(二〇四一)六月二十三日 了俊の軍肥後菊池なる隈部、染土の兩城を陥る。良成親王武朝と共に逃れ給ふ。
 弘和二年(二〇四二)六月一日 良成親王阿蘇山衆徒をして天下泰平九州靜謐を祈らしめ給ふ。
 弘和三年(二〇四三)三月十二日 筑後御原郡河北莊を賴治に賜ふ。
 三月廿七日 懐良親王筑後矢部に薨去。
 元中四年(二〇四七)十月十七日 良成親王肥後宇土にあり由利信濃守を御使として御劍を五條賴治に賜ふ。
 元中七年(二〇五〇)正月十八日 良成親王賴治に命じて筑後北邊の諸族を成敗せしめ給ふ。
 元中八年(二〇五一)九月 良成親王八代に御在陣ついで筑後矢部に入り給ふ。
 十二月九日 賴治軍忠を吉野朝廷に奏す。
 元中九年(二〇五二)閏十月 後龜山天皇京都に御還幸。
 明德四年(二〇五三)二月九日 良成親王阿蘇惟政をして九州の宮方再興を謀らしめ給ふ。
 三月十二日 良成親王筑後河北莊内及肥前神埼上八郷の地を賴治に安堵せしめ給ふ。
 應永元年(二〇五四)十二月十九日 良成親王五條良量に筑前下津(座?)郡阿蘇一族等の舊領を賜ふ。
 應永二年(二〇五五)十月二十日 良成親王賴治の軍功を褒し給ふ。

應永十年(二〇六三)三月七日 賴治上妻郡大淵村に熊野神社を創建す。
 應永三十三年(二〇八六) 賴治(珠山宗剛)卒す。
 應永年間 良成親王薨去。
 文政十一年(二四八八)三月 牧園茅山行在或問を著す。
 天保弘化の頃 田中元勝「征西大將軍宮譜」を著す。
 明治九年(二五三六)九月 船曳鐵門「靈沼餘滴」を著して征西大將軍宮の御事蹟に關する意見を發表せり。
 明治十年(二五三七) 船曳鐵門上妻郡矢部村なる良成親王御墓の考證的建白書を其筋に提出せり
 明治十一年(二五三八)五月 上妻郡矢部村大字北矢部大柚(又御側)なる後征西大將軍宮良成親王の御墓御治定墓掌墓丁を置かる。
 明治十二年(二五三九) 筑後の有志者相謀りて御井郡合川村字宮盾の地に私に一小祠を立て、良成親王の靈を奉祀す。
 明治十三年(二五四〇)八月 肥後國八代町に懷良親王の靈を奉祀し、良成親王の靈を配祀す、
 官幣中社八代宮即ちこれなり。
 明治廿一年(二五四八)十一月 御井郡宮ノ陣村に宮陣神社を營み良成親王の靈を奉祀す。

明治廿八年(二五五五)三月 莊政友「勘解由次官正五位上清原賴元傳」を著す。
 明治三十年(二五五七)七月 祖先の勳功に依り五條賴定に特に男爵を授けられ華族に列す。
 明治三十三年(二五六〇)三月 「將軍梅記念之碑」を建つ文は時の郡長渡邊村男の撰なり。
 十月 東宮殿下(後の大正天皇) 宮陣神社御參拜松樹を御手栽遊ばさる。
 此時佐々木巳喜次は將軍梅の由來につき御説明申上ぐ。又篠山城頭に御行啓の際には三谷有信大保原合戦の史實を言上せり。
 明治三十五年(二五六二)十一月 菊池武光に従三位を贈らる。
 明治三十六年(二五六三) 酒卷鷗公「懷良親王」を著す。
 明治四十四年(二五七一)三月 筑後史談會宮陣神社に懷良親王の尊靈合祀の事を其筋に請願す。
 九月 宮陣神社に懷良親王の神靈を合祀す。
 十月 三井郡教育會同郡小郡村字前伏に「大原古戰場碑」を建つ。
 十一月 明治天皇久留米大本營より御還幸の御途中玉車大原附近御通過の際侍從武官長中村男爵より大原合戦の大要を聖聽に達せらる。
 是月五條賴元に正四位を同賴治に従四位を贈らる。
 明治四十五年(二五七二)三月 柳河史談會五條氏贈位記念講演及展覽會を開く。

大正元年(二五七二) 歩兵第五十六聯隊並に第十八師團借行社内杉原鼓澤の描ける征西大將軍宮並に菊池武光の大原合戦に於ての奮闘圖を掲ぐ。

大正四年(二五七五)六月 熊本縣教育會は藤田明に囑して「征西將軍宮」を編纂出版す。

九月 豫備陸軍歩兵中尉田中耕祐「大原戦史」を編す。

大正五年(二五七六)十一月 陸軍特別大演習の際肥前旭山なる御野立所に於て田中耕祐大原合戦の史實を大正天皇の聖聽に達す。

大正六年(二五七七)三月 「宮陣神社縁起」の出版成る。

大正八年(二五七九)十二月 熊本縣教育會菊池郡支會「菊池勤王史」を出版す。

大正九年(二五八〇)四月 皇太子殿下(今上天皇)久留米借行社行啓の節渡邊村男五條家勤王の概要を御謹話申上ぐ。

十二月 久邇宮邦彦王殿下將官演習の爲久留米市に御滯泊中、黒岩萬次郎召に應じて「筑後に於ける征西大將軍宮の御事蹟」に就き御講話申上げ、且つ菊池勤王史及校訂筑後志を献上す

大正十年(二五八一)四月 國定尋常小學國史に大原合戦對陣圖を挿入して同合戦の史實を掲ぐ。

大正十一年、十二年の頃 八女郡費を以て五條文書を影寫して郡に保管せり。

大正十二年(二五八三)五月 三井郡の事業として石原繁雄に囑し「懷良親王と三井郡」を編纂出版す。

大正十三年(二五八四)十二月 福岡縣八女郡星野村々長今村和方「懷良親王御在所並に御薨去地考」を著し諸大家の意見を徴せり。

昭和四年(二五八九)十一月 菊池史談會植田均の編纂に係る「純忠菊池史乘」を出版す。

昭和五年(二五九〇)八月 秩父宮殿下太刀洗飛行隊に御入隊中大原古戰場を御巡視遊さる。是月天野耕峯其描く所の菊池武光血刀を洗ふ圖を同殿下に献上せり。

十二月 八女郡町村長會の決議に依り良成親王の御事蹟に關する文献并に五條男爵家秘藏の寶物類を郡として永久保存すべく同男爵邸内に耐火震の小寶物館を建設せり。

昭和六年(二五九一)三月 福岡縣社會教育課より成人教育資料として「筑後に於ける兩征西大將軍宮」を編纂頒布せり。

昭和八年(二五九三)四月 十八日より五日間八代宮に於て祭神薨後五百五十年記念大祭を行ふ。

352
578

昭和八年十月廿四日印刷
昭和八年十一月三日發行

【非賣品】

福岡縣三井郡宮陣村三百二十四番地

著作兼發行者 宮陣神社事務所

代表者社掌 田中九八郎

印刷者 久留米市鍛冶屋町二十三番地

秋山源次郎

印刷所 久留米市鍛冶屋町二十三番地

秋松活版所

終

